

第8回 ペルシア戦争

1 ペルシア戦争

- そのころオリエント世界では、()が大帝国を築いていた。
→アナトリア半島西部のギリシア人の植民市も、その支配下に入っていた。
→ ()年、()の()が反乱を起こした。

<第1回ペルシア戦争>

- このイオニア植民市の反乱を、同じギリシア人のアテネが援助した。
→アケメネス朝ペルシアの()はこれに怒り、遠征を行った。
→しかし嵐によって失敗した。

<第2回ペルシア戦争>

- アケメネス朝ペルシアのダレイオス1世が、再び遠征を行った。
→前490年、()でアテネに敗れて、失敗に終わった。



ミレトス

イオニア植民市の中心都市であるミレトスは、最古の哲学者として有名なタレスが活動した場所である。



ダレイオス1世

第5回のプリントをもう一度見ておこう。アケメネス朝ペルシアの最盛期の王である。



マラ톤の戦い

上陸したペルシアの大軍に対して、アテネの重装歩兵が突撃して勝利した。この戦いが、マラソンの起源とも言われる。

<第3回ペルシア戦争>

- 前480年、アケメネス朝ペルシアのクセルクセス1世が、3度目の遠征を行った。
→ ()で、レオニダス王が率いるスパルタ軍を全滅させた。
→しかし ()で、アテネの()将軍率いるギリシア艦隊に敗れた。
→前479年、()でも、アテネ・スパルタの連合軍に敗れた。



クセルクセス1世

ダレイオス1世の息子である。ペルシア戦争のような遠征や巨大建築物の建設は、財政を悪化させた。



映画『300』

テルモピレーの戦いを描いた作品。歴史映画というより、ファンタジー映画として見た方がいいかも。ただスパルタの雰囲気はよく伝わる。



テミストクレス

侵攻するペルシアに対して、海上で迎え撃つことを主張した。戦後は英雄となったが、そのことが彼の人生を狂わせた。

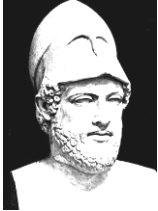
2 アテネの繁栄と民主政

- 戦後アテネは、アケメネス朝ペルシアの次の遠征に備えて、多くのポリスと()を結び、その盟主となった。

- アテネは、防衛費を集めるという理由で、他のポリスからお金を集めていた。
→結局アケメネス朝ペルシアは攻めてこず、お金はアテネが自分のために使った。
→アテネは、アテネ帝国といわれるほど強力になった。

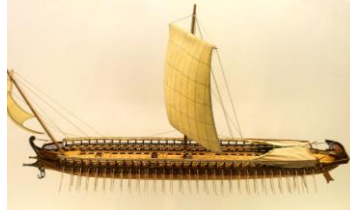
◆ () 時代 (前 443～前 429 年)

- ・サラミスの海戦では () の漕ぎ手として () が活躍した。
→そのためペルシア戦争後、アテネでは無産市民の発言力が増していった。
→全ての成人男性市民が参加できる () が最高機関となった。
→これによりアテネの民主政治が完成したとされる。



ペリクレス

アテネが最も繁栄した時代に、将軍職を務めた。デロス同盟の資金をアテネのために流用したことは、ペロポネソス戦争を招いた。



三段櫂船

200 人の乗組員のうち、170 人は漕ぎ手である。船先につけた衝角を、相手の船の横にぶつけ、浸水させるという戦い方だった。



アゴラの跡

アゴラについては、第6回のプリントをもう一度見よう。ここに市民が集まって、民会が開催された。

<アテネの民主政の特色>

- ① 民会に参加できるのは、18 歳以上の () に限られた。
※市民権法により、両親がアテネ市民でないと市民権は得られなかった。
- ② 18 歳以上の男性市民が民会に集まり、多数決をとる () であった。
- ③ 公職はくじ引きで決められたが、 () 職だけは選挙で選んだ。
- ④ 民衆裁判所は、民衆から () がくじ引きで選ばれて判決が出された。
- ⑤ 政治家や役人の不正を、民衆が弾劾裁判で訴えることもできた。

3 ポリスの衰退

・デロス同盟の盟主であるアテネに対して、 () の盟主であるスパルタがこれに対抗した。

- ・前 431 年、アテネとスパルタの対立から () が始まった。
→アテネではペリクレスの病死後、 () と呼ばれる政治家たちが、民衆を扇動する () をおこなったため政治が混乱した。
→スパルタが勝利して、ギリシアのリーダーとなった。
- ・ギリシアの覇権をにぎったスパルタに対して、 () が対抗した。
→前 371 年、レウクトラの戦いでスパルタを破り、ギリシアの覇権をにぎった。
- ・長引く戦争によって農地は荒廃し、没落する市民が続出した。
→兵士も () が多くなり、「自分のポリスのために命をかけて戦う」という伝統的なポリス社会は衰退していった。



トゥキディデス

ヘロドトスと並んでギリシアを代表する歴史家である。ペロポネソス戦争について、客観的・教訓的な視点から、詳細な記録を残した。

